スペシャル対談

コダックジャパン 代表執行役員社長 藤原 浩 氏
イーストマンコダック社プレジデント ヴァンダグリフ 氏

藤原浩社長㊧とランディ・ヴァンダグリフプレジデント

イーストマン・コダック社は昨年3月、PROSPERインクジェット事業の売却を表明したが、今年4月、この発表を翻して今後の事業継続を決定した。売却表明後の「drupa 2016」でも次世代インクジェットテクノロジーKodak ULTRASTREAMを発表するなど積極的な開発を続けて事業価値を高めてきたこと、さらには前年比40%増というPROSPERの好調な業績が今回の事業継続につながった。ULTRASTREAMについては、パートナー各社で印刷ソリューションへの搭載を前提とした本格的な検討が始まっており、2019年にはULTRASTREAMベースの製品が発売される見通しだ。

今回、コダックのインクジェット事業の新しい責任者となったランディ・ヴァンダグリフ氏が来日し、「コダック インクジェットビジネスの未来」をテーマにコダックジャパンの藤原浩氏と対談した。

インクジェットビジネスの未来語る

ULTRASTREAM技術を進化させ 規模と成長加速へ

【消耗品・サービスの売上は前年同期比26%増】

藤原 今回、コダックがインクジェットビジネスを継続する知らせを聞いて、コダックジャパンとしても大変うれしく思っています。

ヴァンダグリフ ありがとうございます。わたしもこの決定を全面的に支持しています。コダックはインクジェットテクノロジーの開発に多大な投資をしています。今回の事業継続の決定は、コダックがこれからも印刷ビジネスに積極的に関わってゆくことを表明したことを意味しています。幅広い先進的な印刷技術をカバーするコダックのインクジェットビジネスですが、成長の理由として次の三つが考えられます。

一つは世界市場における導入台数・稼働台数の増加です。二つ目はトッパン・フォームズ㈱のように、熱心なリピート顧客の存在です。増え続ける印刷需要に対応するために複数のPROSPERプレスを導入される顧客が多数います。三つ目は販売台数の増加に伴ってインクの消費量が増え、その結果インクの製造単価がさらに削減できたためです。

【新しいビジネス分野を開拓するStreamテクノロジー】

藤原 コダックのインクジェット製品は日本でも高い評価を得ています。コダックはインクジェットテクノロジーを提供し続けて今年で50年になります。その豊富な経験を活かして、今後も他社とは一線を画すコダック独自のStreamインクジェットテクノロジーによる価値提案を続けてほしいと日本のお客様も願っています。

ヴァンダグリフ ヴァンダグリフ エンタープライズインクジェットシステム事業部の基本的な経営戦略は、現在64台のPROSPERプレスと1329台のPROSPERヘッドを含むインクジェット製品のラインアップを今後も提供し、設置・稼働させ続けていくことです。これらの実績と経験を踏まえながら新しいULTRASTREAM技術を進化させて、OEM提携によるインクジェットビジネスの規模と成長を加速させます。これこそが日本の顧客への期待に沿うものだと確信しています。

藤原 「drupa 2016」ではPROSPERの新たな可能性として、ラベル・軟包装材分野や室内装飾分野でのビジネス提案を行いました。新しい市場でコダックの技術的価値を高めることはそのまま、インクジェットビジネスの成長と拡大につながると思っています。

ヴァンダグリフ その通りです。コダックのStreamテクノロジーは、絶えず変化し続けるの市場でシェアを拡大しながら、今後もお客様に充実したサポートを提供してゆくでしょう。

藤原 昨年、日本ではトッパン・フォームズ㈱客様が5台目となるProの印世界最大のPROSPERRユーザーとなりました。日本でも好調なインクジェットビジネスですが、2017年の進捗状況を世界的に見るとどのような状況でしょうか?

ヴァンダグリフ KODAK VERSAMARK事業、KODAK PROSPER事業を含むエンタープライズインクジェットシステム事業部（EISD）の第1四半期の収益は3700万㌦で、2016年同期の3400万㌦に比べて9%増加しました。

PROSPER事業は成長を続けていて、2017年第1四半期には、消耗品およびサービスの売上が前年同期に比べ26%の伸びを示していました。同社は食品、飲料、ヘルスケア市場に映させる全方位的な開発プログラムを実施してきました。これにより開発段階から見込み顧客を確保できました。

ULTRASTREAMはStreamテクノロジーが拡張してきた市場、すなわち雑誌/カタログ、包装材、ラベル、室内装飾その他の市場にそして最初のULTRASTREAMソリューションは、2019年に製品化される予定です。

藤原 日本のPROSPERユーザーはULTRASTREAMへのアップグレードが行われるのかどうかについて、強い関心を持っています。

ヴァンダグリフ PR術の導入を検討しているSPERプレスとインプリンティングシステムについては、引き続きコダック独自のコンティニアス インクジェットテクノロジーの価値を維持しつつ、OEMパートナー企業の印刷ソリューションに容易に統合できるようにすぐれた柔軟性を実現しています。また開発の初期段階から幾つかのパートナー企業に参加いただき限られます。

藤原 ULTRASTREAMのパートナー企業には、富士機械工業㈱や三菱重工印刷紙工機械㈱（MHI-PPM）など日本メーカーも名を連ねていますね。新たなパートナーとのOEM提携は進んでいますか?

ヴァンダグリフ 一部の戦略的エンドユーザーを含む19社と基本合意書を締結しています。評価キットの提供が始まったら、ぜひ検証・開発を検討したいと申し出ているOEMパートナー企業とも話し合いを続けています。OEMパートナー企業は日本企業5社の他、GOSS China、Matti、Utecoなど、世界中の多種多様なビジネス分野に及んでいます。つい最近も従来のグラビア印刷による無駄を省きコストを削減しようと、デジタル印刷技術の導入を検討している室内装飾関係の印刷会社がULTRASTREAMに大きな関心を寄せていました。

藤原 東京オリンピックの開催を前にULTRASTREAMを搭載した製品が発表されると思うと本当に楽しみです。

ヴァンダグリフ ありがとうございます。

【戦略的ユーザーを含むパートナー企業19社と提携】

藤原 ULTRASTREAMのパートナー企業や三菱重工印刷紙工機械㈱（MHI-PPM）など日本メーカーも名を連ねていますね。新たなパートナーとのOEM提携は進んでいますか?

ヴァンダグリフ 一部の戦略的エンドユーザーを含む19社と基本合意書を締結しています。評価キットの提供が始まったら、ぜひ検証・開発を検討したいと申し出ているOEMパートナー企業とも話し合いを続けています。OEMパートナー企業は日本企業5社の他、GOSS China、Matti、Utecoなど、世界中の多種多様なビジネス分野に及んでいます。つい最近も従来のグラビア印刷による無駄を省きコストを削減しようと、デジタル印刷技術の導入を検討している室内装飾関係の印刷会社がULTRASTREAMに大きな関心を寄せていました。

藤原 東京オリンピックの開催を前にULTRASTREAMを搭載した製品が発表されると思うと本当に楽しみです。

ヴァンダグリフ ありがとうございます。

17万5000人来場、独国外から74%
包装分野のトレンド一望
盛況の「interpack 2017」

interpack 2017の会場

2865社が出展、17万5000人もの関係者が来場し、会期中に多くの商談が成立、ドイツ国外からの参加が過去最多レベルを記録した世界最大かつ最も重要な包装・加工業界専門メッセ「interpack」は、5月10日にその幕を閉じた。特筆すべきは来場者の質で、全体の74%がドイツ国外から視察に訪れ、また意思決定者の割合も4分の3という記録を樹立した。

世界168カ国から、一流の業界関係者が多数来場したことに、出展者は高い満足度を示した。「interpack2017」の視察に関する公式アンケートにおいて、およそ98%が満足しているあるいは非常に満足していると回答。出展製品への関心度は、おしなべてどの分野についても高かったが、なかでも包装資材製造は、前回開催から著しい伸びが見られた。

「interpack」は、業界関係者にとって必要不可欠かつ参加必須な専門メッセであり、ほかにはない刺激を与えてくれる。というのは新規・潜在顧客、そして既存のパートナーと出会い商談ができる、まさにビジネスが進む場として、世界中で広く認知されているからだ」と「interpack2017」実行委員会会長のF・クレフェンツ氏は強調した。

統合的開発力アピール
デジタルプレス分野へ参入増加か

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ㈱（代表取締役社長：辻重紀氏、以下・FFGS）は、5月4～10日の7日間、ドイツ・デュッセルドルフの「Messe Dusseldolf」で開催された「interpack2017」に、世界の最新ニーズに即応する富士フイルムの革新的なインクジェットソリューションを出展した。日本からも多くの顧客が同社ブースに立ち寄り、連日、活況の中でじっくりと、最新ソリューションの革新性・実効性を紹介した。

「interpack2017」は3年に一度開催される包装および加工業界最大の国際展示会。「食品・飲料加工、包装機械」「化粧品・医薬品・消費財（非食品）・工業製品包装機械」「製菓・製パン機械」「包装資材」「包装加工機械」「輸送機械」「サービス」など、毎回、包装に関わる幅広い業種の出展があるが、今回はとくに出展社数が多く、60カ国・2865社の包装・加工業者およびサプライヤーが出展。常設の17ホールでは収まりきらず、全18ホールに加えロシア館・インド館が設営された。来場者も163カ国から約17万5000人を集めて大盛況。いま最も活気のある市場の一つである包装分野の世界的なトレンドを一望することができる7日間だった。

富士フイルムのブース

【前回に引き続き「デジタル化・自動化・環境対応」が最大のトレンド】

今回のinterpackにおける全体のトレンドは「Digitalization/Industry4.0/Sustainability」と「SAVE FOOD」。前回からの流れを継承し、デジタル化や自動化、環境対応が大きなテーマになった。

「SAVE FOOD」は、interpack2011から提唱が始まったもの。近年、世界的な規模で問題になっている〝食物の保存や環境負荷低減、エネルギー消費の削減〟について、innovationpark特設ホールで、バリア性の高いフィルムや生分解性の高いフィルム基材など、さまざまなメーカーの効果的な取り組みが紹介されていた。

環境対応を前提としたデジタル化や自動化は、今回もinterpackの最大のトレンドで、多くの出展社から、デジタルプレスを中心に、多種多様な提案がなされた。キーワードは「ラベル」「軟包装」「紙器」など。これまでデジタルプレスをリードするメーカーはある程度限られていたが、今回のinterpackでは、実機の展示こそなかったものの、デジタル印刷機の開発に取り組み始めたアナログ印刷機メーカーも増えてきており、今後、インク関連や周辺機材も含め、「フレキソ、グラビアとの共存」も見据えた、より多くの企業の〝デジタルプレス分野への参入〟が予想される。

【富士フイルムブースでは、先進のインクジェット技術を軸に、多彩なサンプル展示により実践的な提案を実施】

今回、富士フイルムはグループシナジーを最大限に活かした非常に応用範囲の広い基幹テクノロジー「FUJIFILM Inkjet Technology」を展示。高精度・高解像度インクジェットヘッド「SAMBA」を中心に各種インクジェットインク製品および関連技術を「FUJIFILM Dimatix' Inc.」「FUJIFILM Specialty Ink Systems Ltd.」「FUJIFILM Imaging Colorants Ltd.」との協働で初出展した。

インクジェット印刷は、従来の印刷産業に限らず、小ロット・多品種のニーズに応えることの出来る印刷方法の一つとして、さまざまな産業の未来を切り拓いていく無限の可能性を秘めている。パッケージ分野においても今後、実戦的な応用・発展が期待されており、会場でも非常に注目度が高く、「ヘッド/インク/画像処理」のすべてを統合的に開発できる富士フイルムならではの技術力に関心が集まっていた。

会期中、富士フイルムブースでは、SAMBAと特色インクを使用したラベル用途向け高速追い刷り印刷デモによるソリューション提案を行ったほか、水性インクを使用した軟包装用サンプル、UVハイブリッドインクを使用した金属缶サンプル等、幅広いアプリケーションに対応したインクジェットプリントサンプルを展示。多くの来場者から注目を集めた。

また既にワールドワイドに導入している商業印刷向け枚葉型インクジェットデジタルプレス「Jet Press 720S」による印刷サンプルと、ワイドフォーマットLED UVインクジェットプリンター「Acuity LED 1600Ⅱ」による印刷実演デモを通じ、既存の商業印刷やサイネージ印刷用途だけでなく、紙器などのパッケージ用途への新たなビジネス提案を行った。また日本国内で先行して市場導入が始まっている軟包装用UVインクジェットデジタルプレス「Jet Press 540W」（仮称）（富士フイルム独自のEUCONテクノロジーを搭載）に関しても、世界各国から多数の問い合わせがあり、世界的な期待の大きさを実感した。

富士フイルムはこれからも、包装業界全体のさらなる発展に寄与できるよう、他社とは一線を画す独自のソリューションをトータルに提案していく。

〈お詫びと訂正〉

本紙2017年7月号1面に掲載しました「FFGS社の新社長就任記者会見」の立会人の写真説明で、伊藤卓夫氏を佐藤卓夫と誤記しました。お詫びと共に、訂正をさせていただきます。

（編集担当）

サカタインクス
現地需要取り込む
生産量増加で米国工場拡張
ボタニカルインキ使用推進も

拡張したカンザス州の工場

サカタインクスは今年4月にアメリカ（カンザス州エドワーズビル）で、生産量増加に伴いUV（紫外線）などのエネルギー硬化型インキ工場を拡張した。旺盛な現地需要を取り込むとともに、将来に向けた製造スペースの確保、リードタイムの短縮などを図っていく。

また6月22日には、JR東海道新幹線の東京駅南乗り換え口構内に同社の企業広告を掲出した。ダイナミックなカラーリングを施したハート形の世界地図が、視覚的印象から〝心臓〟を想起させ、それをキャッチコピーに活かし、「世界が鼓動する美しい色を。」としている。

東京駅に掲出した企業広告

【植物由来成分を含有する環境配慮型グラビア・フレキソインキ「ボタニカルインキ」】

近年、環境保全を目的とした規制は一段と厳しくなり、環境負荷の低減が大きな課題となっている。同時に消費者の環境保全意識も高まり、商品購入意欲の一要因にもなっている。さらに印刷業界でも印刷基材や印刷インキなど材料全般において、環境対応を意識した製品が増えてきている。なかでもバイオマス（再生可能な有機資源由来の物質）を利用した材料は、化石資源の節約や地球温暖化防止（二酸化炭素排出量の削減）の観点から、特に注目されている。

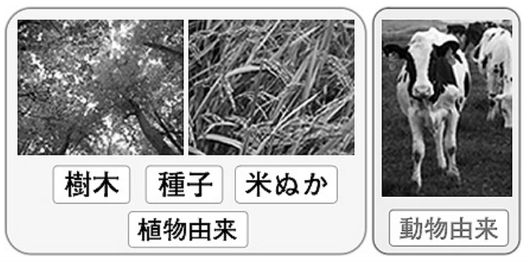
同社はこのような市場動向に対して脱化石資源の検討を進め、植物由来成分からなる材料を積極的に使用したインキを「ボタニカルインキ」と呼称するとともに、そのインキを使用した印刷物に明示する「ボタニカルインキマーク」の普及に努めている。

【ボタニカルインキ】

バイオマスとは「バイオ＝生物資源」「マス＝量」を示し、再生可能な有機性資源で化石資源を除くものを意味しており、動物由来と植物由来に大別される。有機性資源を使用することにより、化石資源の節約や地球温暖化防止（二酸化炭素排出量の削減）に効果がある。特に二酸化炭素排出量の削減に効果があるとされる植物由来の材料としては、さまざまな植物から得ることができるが、一例としては樹木、種子、米ぬかなどが挙げられる（上図参照）。

同社はこういった植物由来の材料を使用し、インキ固形分中に一定割合以上の植物由来成分を含む製品について「ボタニカルインキ（※）」と称し、その名称およびマークについて登録商標を取得。ボタニカルという言葉は、「植物の」という意味を持ち、洋服のプリント柄、シャンプー、飲食品などのさまざまなビジネスエリアで浸透してきており、一般消費者にも馴染みのある言葉となっている。

（※）同社では「ボタニカルインキ」と称してロゴマークが付与できる要件として、固形分中の植物由来成分度（ボタニカル度）を10%以上としている。



4×1輪転機用 ブラン胴洗浄機
SSBC-T10
◎イニシャルコストの低減
2胴の洗浄を1台の洗浄機で同時処理
◎ランニングコストの大幅削減
1本の洗浄布の表裏両面で、それぞれ1胴ずつ、2胴を同時に洗浄
株式会社エス・エム・ゼット
清水製作株式会社
〒108-0023 東京都港区芝浦3-17-10
TEL 03-3451-1261(代) FAX 03-3798-1465

MEIWA RUBBER CO.,LTD
先進性とクオリティー
ECO対応高速印刷ゴムローラ
ゴムローラ総合メーカー
明和ゴム工業株式会社
http://www.meiwa-rubber.co.jp